巻頭言　『グローカルプログラムに参加して』

髙橋 佳太郎（国際リハビリテーション研究会事務局、JICA海外協力隊派遣予定者）

〔巻頭言〕
『グローカルプログラムに参加して』
髙橋佳太郎
〔特集〕 書籍紹介
『学ぶことは変わること 自分と地域の力を引き出すアイディアブック』の魅力
石本馨
寺村晃
古川雅一
家亀志伸
大西海斗
〔連載〕
[山口髙橋の研究万華鏡]
『シリーズ論文を書く』
山口佳小里
〔コラム〕
[世界のめがね]
大室和也
〔お知らせ〕

本号の特集

本号では、書籍の紹介と監修者・翻訳へ関わられた方々よりご執筆いただきました。書籍紹介は初の試みとなりますが、JSIR役員・会員も関わっており、その背景や想いをお届けします！

大暑の候、皆様におかれましてはなお一層のご活躍のことと存じます。

私は2022年11月よりニュースレターの編集担当として本研究会の活動に携わらせていただいております。記事の執筆は今回が初めてになりますので、以後お見知りおきいただけると幸いです。

私は2023年度の2次隊でチリに派遣予定の理学療法士なのですが、つい先月までJICAが行うグローカルプログラムに参加しておりました。本プログラムは、派遣前研修の一環としてJICAが始めた新たな試みで、日本の各地域が抱える課題に対し、自治体等が実施している地方創生等の取組みにOJTとして参加機会を提供していただけるものです。理学療法士としてではなく、一人の人間として地域の課題に取り組んだ日々は、病院以外の社会を知らなかった自分にとってとても貴重な経験でした。また、地域の活性化やまちづくりといった行為が、結果的に私たちが目指している「健康」に結びついていくことを知り、CBRに近い概念を実践の中で学ぶことができました。本プログラムの詳しい活動内容については、次号の特集記事で執筆させていただく予定ですので、そちらも合わせてご覧いただけると幸いです。

ポストコロナを迎え、先に紹介した研修や学術活動も対面での形式を取り戻しつつあります。本研究会をはじめ、国内外で活躍されている皆様の一層のご発展を心よりお祈りし、結びの挨拶とさせていただきます。

特集：書籍紹介
「学ぶことは変わること　自分と地域の力を引き出すアイディアブック」の魅力

監修者：石本馨(Bridges in Public Health, 作業療法士)

この度、当研究会会員9名が翻訳作業に参加した「学ぶことは変わること 自分と地域の力を引き出すアイディアブック」（書籍＆電子版）が出版されました。この本は1982 年の初版以降、今もなお増版が続くベストセラー“Helping Health Workers Learn”を日本語に訳したもので、原著者は“Disabled Village Children”や”Where There Is No Doctor“（邦題：医者のいないところで）を執筆した David Werner です。ひとりひとりが健康な地域づくりや公正な社会づくりのアクターとなるために、必要な知識やスキルが人から人へ広がっていくにはどうすればいいか…。世界各地での実践経験から生み出されたのがこの本です。

海外活動で直面する課題のひとつに「現地の人の理解を得る」ことがあります。この本には地域住民の理解を得る方法や、参加型研修やワークショップ運営のノウハウ、現地の人の心に刺さる伝え方などが理論的かつ具体的に書かれています。本書に書かれているLearning by doing（やってみて学ぶ）、Education for Change（変化を起こすための教育）は、日本を含めどこの国でも、そして、保健分野に留まらず多岐にわたる分野で応用できるものです。そして何より、人びとの健康が社会のありようと深く結びついていることへの気づきを促すことと、そんな社会のありように立ち向かおうとする地域住民を応援することが、David Wernerがこの本に込めたメッセージだと思います。

私は監修者＆翻訳者の一員としてこの本の出版プロジェクトに携わりました。翻訳の苦労は後述の皆さんの生の声をお読みいただくとして、私は監修者としての声をご紹介します。監修の役割は総勢29名の翻訳ボランティアが訳した文章をチェックし、一冊の本として齟齬がないように整えることです。文章に込められた訳者の思いを尊重しつつ、他の人が訳した文章と照合しながら訳語を統一し、かつ原著のテイストを損なわないよう必要に応じて文章を再構成するという作業が、果てしなく続きました。でも、「早く行きたければ、一人で進め。遠くまで行きたければ、みんなで進め」（If you want to go fast, go alone. If you want to go far, go together）という諺どおり、多くの翻訳ボランティアみんなで作業したことで、時間はかかりましたが良いものができたと思います。本書が一人でも多くの人の手元に届くよう祈っています。

■本の詳細を知りたい方はこちらをご覧ください。販売サイトも載っています。書籍版は Amazonで、電子書籍（PDF）は BASE でそれぞれ購入可能です。
→ https://sites.google.com/view/hhwljapan2023?usp=sharing

「翻訳者より- 本書籍との出会いや魅力について -」

翻訳者①：寺村晃(大阪保健医療大学, 作業療法士)

私が2011年から2013年にかけてJICA海外協力隊としてニカラグアに派遣されていた頃、現地の理学療法士との会話の中でこの本（スペイン語版）を紹介してもらったことがあります。当時、私はリハビリを必要とする子供たちを訪問して介入を行っていましたが、座位保持装置や平行棒などの具体的な訓練道具の作成や使用方法について考えていました。

私は言語だけではうまく説明できなかったため、この本は現地のスタッフや家族に、情報を伝えるため貴重なツールとなりました。

私が特に感銘を受けたのは、本書が持つ実践的な側面です。理論的な知識だけでなく、実際の現場で役立つ具体的な手法やツールについても触れられています。さまざまな症例や事例が紹介されており、図表、写真などが豊富に掲載されており、理論だけでなく視覚的な情報もあり、途上国での医療福祉に携わる人々にとって、実践的な参考書として役立つでしょう。

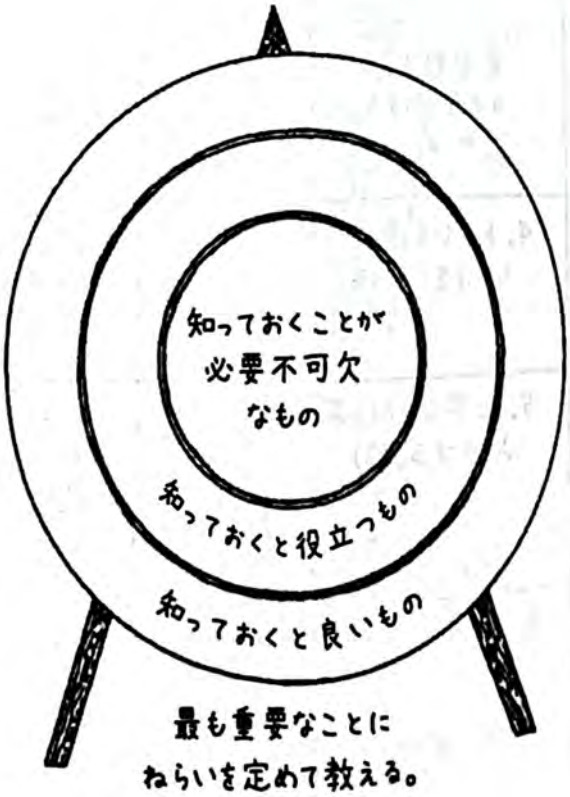
この本には、途上国の医療福祉に関連する情報がたくさん詰まっており、現地の状況に合わせたアプローチや解決策が提案されています。途上国の現地の方々と共通の言語で議論するためには、この本は必須アイテムと思います。ぜひ、一読してみてはいかがでしょうか？

翻訳者②：古川雅一(仙台医健・スポーツ専門学校, 理学療法士)

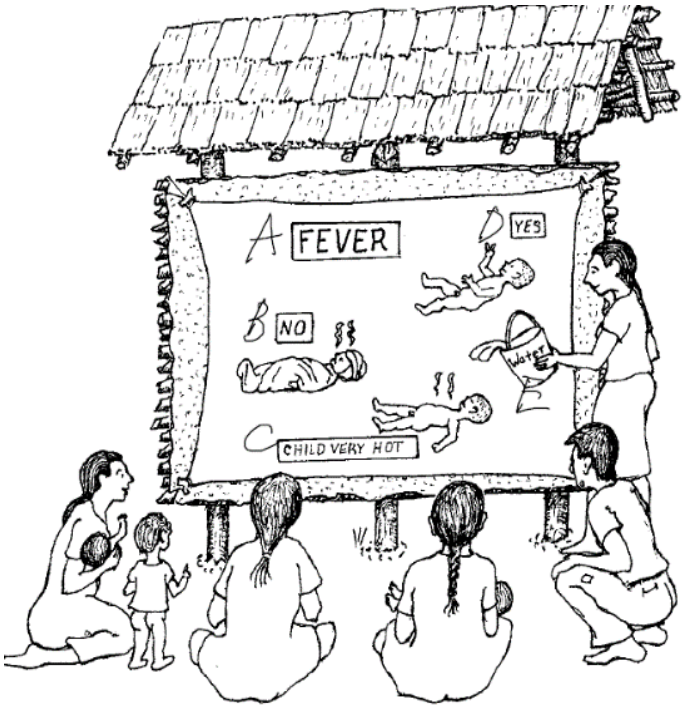
私は2017年よりJICA海外協力隊としてキルギスで活動をしていました。現地にはリハビリテーション専門職の養成校や国家資格は無く主に数週間の研修を受けた運動インストラクターが身体機能に障害を持った人々に介入していました。活動中に求められたのは、「どのようにすれば良いのか？」といった疾患別に決まった方法であり、「なぜそのようにするのか？」といった理由はあまり求められませんでした。自分なりに必要だと思うことを考え実践やセミナーを通して伝達を行ってきましたが、活動終了時には「本当にこれで良かったのか？」と感じながらの帰国でもありました。

本書に出会ったのは帰国後になります。今回翻訳を担当した５章を見るだけでも「２つの授業計画」や「最も重要なことにねらいを定めて教える」、「解剖学を教えるための興味深く有用な方法」といった項目が具体的に書かれています。このような項目を見ると、伝達してきた内容はより精査が出来、伝え方もより工夫できたのではないかと感じ、遅ればせながらそこからアイデアが浮かんで来たことを覚えています。

本書は協力隊活動で、「この進め方で良いのか？」と疑問に感じた時にヒントを頂ける有用なツールであると感じます。本書が国際協力を行う人々の目に触れ、一助になることを願っています。



翻訳者③：家亀志伸(JICA二本松訓練所 国内協力員, 理学療法士)

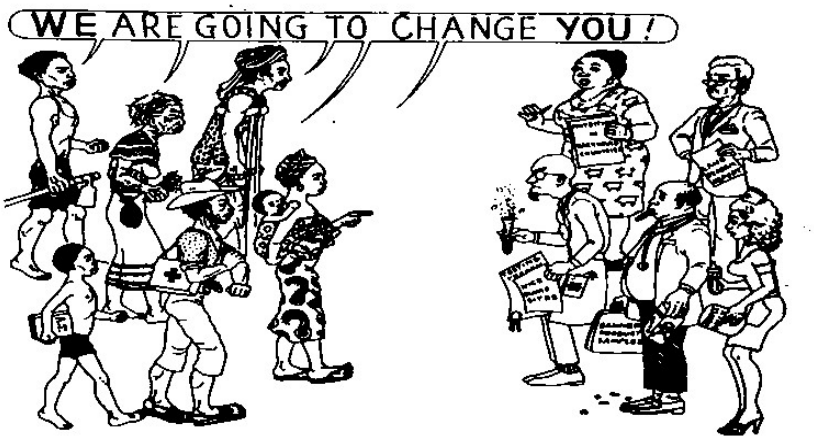


翻訳プロジェクトの呼びかけに意気込んで手を挙げたものの、日々の仕事と育児で手一杯で…監修チームの皆様のご配慮で短めの章を担当させていただき、さらには監修チームの方とペアを組ませていただきました。沢山の方に役立つ本を翻訳するという偉業の一助となれたこと、大変ありがたく思います。

生まれ故郷マラウイにて卒論の現地調査を行なった際、村のHealth workersが地域の病気の方や障がいのある方のケアを担っている場面に同行した体験から、翻訳に参加したいと思いました。当時まだPT養成校もなく、公立病院や地域で働いているPTはごく僅かでした。Outreachの範囲も限られており、多くの障がいのある方や理学療法が必要な方をケアできない状況でした。医療態勢も、街にある公立病院→地方のClinic→村々のHealth posts→地域密着のHealth workersへと分業されていました。特に11章では如何に地元の資材や人材を活用してHealth workersが住民に知識・技術を提供するか、という内容で、何より重要だと実感しています。JICA協力隊をはじめCommunity Based Rehabilitationに携わる方にぜひ読んでいただきたいです。

翻訳者④：大西海斗
（株式会社コーエイリサーチ＆コンサルティング, 理学療法士）

David Werner氏の名に初めて接したのは、理学療法士1年目の頃。この1枚のイラストでした。
「私たちがあなたを変える」
この1枚をきっかけに相互主体的関係（Inter-subjectivity）をはじめ、国際協力、CBR（地域に根ざしたリハビリテーション）、障害と開発の奥深さに魅かれていきました。
『Where There Is No Doctor』（医者のいないところで）をはじめ、多くの著書を執筆したDavid Wernerという名を知らないという方は少なかろうと思います。



© David Werner

私もそのファンの1人であり、同じ実践者でありたいと思いながら国際開発分野の仕事に携わっています。
彼が多くの人に伝えてきた「人とのつながり」という原点、そして「実践」を繊細かつ丁寧に伝えられてきた言葉の数々と方法、その重要性と温かみは、初めての出会いから12年経った今でも、今もなお私の中に新鮮さを保ちながら残り、より学びを深める活力につながっています。
今回、改めて翻訳という作業を通じて、David Werner氏の表出された文章を再考し、学び、そしてその背景にある彼の哲学を感じることができました。おそらく他の翻訳者、監修者の皆さんも、単に英語を日本語にするという作業に留まらず、いかに彼の哲学を伝えられるか、ということに注力されたのではないかと思います。この度は貴重な機会をありがとうございました。

［連載］山口髙橋の研究万華鏡＊

『論文つれづれ』

「研究に興味があるが、何をすればよいのか分からない…」
という声にお応えし、気まぐれに研究について綴ります。

さて、今回は研究成果の発表の１つである論文について書いてみようと思います。▼論文には様々な種別があり、原著論文やレビュー論文など、どの学術領域にもある種別の他に、臨床をもつ学術領域における症例報告のような、領域に特徴的な種別もあります。WHOの学術誌であるBulletin of the World Health Organizationには、“Research”、“Systematic reviews”、“Policy & practice”、“Lessons from the field”、“Perspective”の５つの種別があり、国際的な公衆衛生の専門誌であることが垣間見える気がします。　▼研究機関に勤めていると、原著論文の数で業績を評価されることがあります。原著論文の定義は様々あるようですが、医中誌では「医学・歯学・薬学・看護学・獣医学およびその関連分野に関わる研究、開発、調査で、独創性、新規性のある文献で、著者名と所属機関名が必ず記載されており、目的、対象、方法、結果、考察、結論で構成されているもの。図、表、写真、参考文献を含み、要旨、要約があるもの。講演または会議録でも、原著的内容、形式を有するもの。論文の簡略化された形式をとった記事（速報・短報）も含む。症例報告は原著論文とする。」と定義されており[1)]、結構幅が広いという印象を受けます。個人的には「新たに何かを明らかにしている」というのが原著論文のイメージです。当然ながら原著論文が全てとは思いませんし、“確からしさ”はピンキリだと思いますが、新しいことがわかる、というのはわくわくしますね！

1）医学中央雑誌刊行会（医中誌）：https://www.jamas.or.jp/database/policy2.html

（国際リハビリテーション研究会理事，国立保健医療科学院　山口佳小里）

コラム：『世界のめがね』

大室 和也
（国際リハビリテーション研究会理事、
AAR Japan［難民を助ける会］）

私がインドでPTのボランティアをしていた時の1枚。文化、経済、医療、人権等々、様々なことを考えた日々でした。ちなみに新しい職場はインドではありません。。

世界中で活躍を展開している会員のめがねを通した世界の姿を各号お届けします。今回は、人類学についてです。

先日、文化人類学者の倉田氏をお迎えし、国際リハカフェsouthを開催しました。文化人類学とリハカフェの初めての接点だったのではないかと思います。ハッとさせられる時間でしたね。これまで、現場に出られたことのある方、それも長期で仕事をされた方は、人類学の書籍を手に取られた方も多いのではないでしょうか。私も国際リハ分野の課題に人類学が光を当てるのではないかと感じたことが幾度もありました。それゆえ意気揚々と、ある大学院の人類学専攻の門をたたいたこともあります（が、「人類学っぽくないよね」と撃沈。違ったらしいです）。人類学の歴史や書籍は多彩な視点を提供してくれますし、気づきの多い分野です。国際リハ研究会と人類学がどんどん接近し、新しい景色に誘ってくれることを期待しています。

最後に私事ですが、今夏より職場が変わります。そこは私が17年ほど前に訪れたとき、人生の大きな転換点をもたらした場所。どんな景色に気づくことになるのか、楽しみです。

［お知らせ］

【国際リハビリテーション研究会第7回学術大会】

大会テーマ：知る・気づく・考える“リハビリテーション2030”－中・低所得国におけるリハビリテーション普及への貢献－

- 日時：2023年11月19日（日）10:00～17:30
- 開催場所：JICA地球ひろば（東京，市ヶ谷）
- 参加費：会員1,000円　非会員2,000円　学生1,000円

一般演題募集中！　参加申込受付中！

【演題登録】　【参加申込】

【学術誌『国際リハビリテーション学6巻1号』投稿論文受付中】

- 投稿締切：2023年8月20日（日）
- 投稿規定については編集委員会にお問い合わせください journal.jsir@gmail.com

編集後記

書籍の翻訳紹介という新たな試みを通して、様々な方の国際協力への思いを知ることができました。現地の人々との関わりの中で得られた知見をより多くの方に届く事を願っています。（長田 真弥）

翻訳後に書籍と出会い、協力隊時代に持っていきたかった内容で溢れていました。現場の悩み解決の必読書！記事を読ませて頂きながら、また改めて気づきや学びを得られました。誠にありがとうございました。（三田村 徳）

事務局　編集担当

大西 海斗（コーエイリサーチ＆コンサルティング）
長田 真弥（姉ヶ崎ケアセンター）
髙橋 恵里（福島県立医科大学保健科学部）
髙橋 佳太郎（JICA海外協力隊候補者）
古川 雅一　（仙台医健・スポーツ専門学校）
三田村 徳　（東北医科薬科大学病院）